

京都市環境審議会
令和 7 年度第 3 回 環境基本計画策定検討部会 会議録

日 時 令和 7 年 1 0 月 3 1 日（金） 午後 1 時～2 時 4 0 分
場 所 京都市役所本庁舎 1 階 環境政策局会議室（環境総務課執務室内）
※オンラインとのハイブリッド
出席者 大久保委員、尾崎委員、桜井委員◆、実重委員、杉田委員（五十音順）
（参考：欠席者 千葉委員、細川委員、吉積委員）

◆：オンライン出席

1 開 会

松下環境企画部長から挨拶

2 議 題

○環境基本計画策定検討部会の進め方について

- ・ 事務局からの資料 1 についての説明。

（質疑応答なし）

○京都市環境基本計画の進捗状況について

- ・ 事務局からの資料 2 についての説明を踏まえ、意見交換。

（桜井委員）

特に内容について異論があるわけではないが感想を述べたい。よりわかりやすい説明の書き方を考えたとき、22 ページの「生物多様性豊かな自然環境と調和した快適で安心・安全なまち」の主観的指標「多様な生きものが生息する良好な自然環境が保たれていると感じるか」という部分の問いに対して、「そう感じる計」の回答割合が前年度より低下して 38% となっている。こうした内容を定期的に報告する際には、この結果がどのように評価され、理解されるのかという観点での記載も必要ではないか。私の認識では、この指標の回答結果は、毎年同じような数値で推移していると思われ、大きな変化がないと理解している。その数値に対して、今のままでよいか、改善が必要なのか、どのような解釈とすべきか説明があるとわかりやすいと思う。京都市の自然環境の割合がこの 10 年間で増減しているのか考えたとき、仮に緑地化が進んでいるにもかかわらず「そう感じる」という回答に変化がないのは、現実の変化と人の意識にズレがあるかもしれないと考えられる。あるいは、緑地が減っているにもかかわらず意識が変化していないということは、その変化を明確化できていないということになる。このように、どのような解釈が考えられるのかといった説明があると、市としての改善点が分かるかもしれない。

(事務局)

アンケート結果は、ある状況の長期的な傾向を把握することも想定しているため、毎年同じような結果になってしまう傾向がある。今回はクロス集計も行っており、その集計結果から、客観的な状況も踏まえ分析することができないかという指摘については、今後、検討していきたい。

(大久保委員)

桜井委員からの指摘にある緑地面積の増減などの影響は、主観的指標にも関連する指摘だと思う。

(実重委員)

どのような方を対象としてアンケート調査されたのか。

(事務局)

6 ページに記載があり、インターネットでアンケート調査を行い、1000 名から回答をいただいたところで締め切り集計を行った。行政区、男女比、年齢構成などは市況とほぼ同じような割合になるよう収集している。

○答申素案等について

- ・ 事務局からの資料 3、4 についての説明を踏まえ、意見交換。

【第 1 章から第 3 章まで】

(杉田委員)

文章の表現に関する細かい点への意見と、諸外国との比較を踏まえた意見がある。表現の点について、以前の部会でもシナジーとトレードオフが分かりにくいと指摘をしたが、本案でもまだ分かりにくいと思っている。表記についてもゆらぎがある。例えば、「シナジー（相乗効果）」と「相乗効果（シナジー）」となっている部分が気になった。

導入にあたる「はじめに」のなかで、国内外の社会情勢の記載をされている部分では、世界がこういった方向に向かっているのかという内容の中で人口減少社会に触れられている。世界全体ではアーバナイゼーション（都市化）が進んでおり、今後、世界全体の 70% が都市になると言われ、今の時代とはまったく違う状況になることが想定される。先進国は人口増加のピークを迎え人口減少社会を先取りしているが、そうしたなかで京都が世界のモデルになりうるのか、京都が都市としての責任をどう果たせるのかということも最近考えている。京都市をめぐる状況の記述も必要だが、世界のなかで見たときにどういった状況か、世界に対する責務も重要なポイントとして触れてはどうかと考える。

(事務局)

シナジーとトレードオフの表記のゆれについては整理する。「シナジー（相乗効果）」という表記に統一したい。国の環境基本計画を参考にして作成していることもあり、その内容も踏まえ精査したい。

アーバナイゼーションについては、ご指摘いただいている人口減少社会の記述の部分で触れることができないか考える。

(実重委員)

カーボンニュートラルやネイチャーポジティブ、生物多様性、サーキュラーエコノミーが網羅的に記載されており、一体的に全体最適を目指されている点について感銘を受けている。シナジーとトレードオフについては、13ページにも記載があり、地球温暖化対策と生物多様性との間にトレードオフが見られる部分もあるが、相乗効果が見られる部分で取組を進めることが必要だと思う。トレードオフについては森林部分の話もあったが、こうした分野では特に意識しないとどっちつかずの問題になると思う。

(尾崎委員)

知らない言葉が多い。環境分野は水資源や家庭のごみ、生物、大気汚染や公害など多岐にわたる。内容については全て落とし込めていないが、主婦の立場からは、ごみ問題やマイバックの取組の部分に関心があった。一方で、生物や河川と言われるとまだ落とし込めていない。自分自身に関連する小さい部分でしか理解できていないものの、自分の周りにある部分だけでもしっかりやろうと思った。自身の関わる女性会でもそのような話ができればと考えている。

(事務局)

大きな話をすることも環境基本計画の要素であるが、それを改善していくのはひとりひとりの行動でもある。今後、主体別指針などを策定し、身近なごみ問題だけに留まらず、このような分野もあるということを計画では見せていきたい。

ごみ問題には関心が得られやすく、それ以外の取組は何をやったらよいか分からないという指摘はもっともだと思う。日々のごみ問題が地球温暖化問題にも繋がっているという部分をいかに連関させていくか必要だと感じている。行動指針を策定する中で、相乗効果がある部分をみせていきたいと思う。

【第4章から第5章まで】

(桜井委員)

答申案として具体的にどこまで書くべきか、書くべきでないか、その基準について十分に理解できていないが、それを踏まえて意見したい。答申案の文章では「参加」の仕組みづくりが強調されているが「参加」とは何か分かりづらかった。施策体系の自然共生社会

について、「きょうと生物多様性パートナーシップ制度の創設」という取組の言及もあるが、ここでいう「参加」とは具体的に何を指しているのか。環境レポートの報告の際にも言及されていた「京(みやこ)の生物多様性担い手宣言制度」には一般の方も参加し発信することで8,000件の宣言があったという記載があるが、そうしたことを指しているのか。そうであればその取組との繋がりがあれば分かりやすい。

また、9ページに「なお、客観的指標については、各分野の代表的な指標を設定し、市民にとって、より分かりやすいものとすべきである。」との記載があるが、各分野が何を指しているのかが分かりづらかった。

なお、第4章の施策体系の3つの分野の記述について、循環型社会の記載のみ四角で縁取りし記載されているが、他の分野の記載とのバランスで気になった。

(事務局)

「参加」の部分について、分かりづらい表現になっている部分もあるためもう一度見直したい。「各分野」については、三分野（脱炭素社会、自然共生社会、循環型社会）を指しているため補足したい。「循環型社会の記載」について、この分野を取り扱っている審議会が異なるためこのような表現となった。循環型社会を所管する事務局と相談しながら整理したい。

(大久保委員)

それぞれの部会の進捗が違うため、最終的にそれらと調整し整えた記載となることが想定される。脱炭素社会の次の部会は11月6日ということだが、あと二つの分野の部会の開催状況はどのようなになっているか。

(事務局)

自然共生社会を扱う生物多様性保全検討部会は、最後の部会が終了している。循環型社会を扱う廃棄物減量等推進審議会は今現在も進行中の状況であり、11月の中旬に部会を開催し、その後答申を行う見通しである。ご指摘の体裁部分については廃棄物減量等推進審議会の事務局とも相談している内容だが、こちらの部会での意見も伝え整理したい。

(大久保委員)

各分野の部会には、相互の調整としてこちらからの意見もインプットしてよいと思う。

答申素案の基本的な方向性として、分野横断的な観点から委員の皆様より指摘があればここでいただきたい。

(桜井委員)

内容に問題があるということではなく、見え方のバランスの観点で先ほど意見した。各部会の考えもあるが、統一した内容で整理した方が読みやすい。

(大久保委員)

桜井委員よりご指摘いただいた「参加」の中身がわかりにくい点と、答申案にどこまで書くかという点で、後者はテクニカルな内容となるが、重要な点としては答申後に環境基本計画本編に落とし込む作業を行う際に、この部会とのコミュニケーションがどのようになるか改めて確認したい。

パブリックコメントに出される計画案は答申の内容に基づいて作成されるものか。

(事務局)

この答申については、環境審議会から京都市への意見という位置付けになる。それを踏まえ、環境基本計画の本編を作成し、パブリックコメントすることになる。

来年度以降の環境基本計画の進行管理については、この部会の名称を「評価検討部会」のように変えてその部会で検討いただくことになる。

(大久保委員)

パブリックコメントは市民に向けて広報されると思うが、部会にも連絡いただきたい。

(事務局)

当然そのように承知している。

(杉田委員)

A I や技術・テクノロジーの部分について、A I は自分自身でもよく使うが、環境政策の中でどうA I を使うのか具体化が必要だと思う。A I を使うことで、市民の行動変容にどうつながるのかという点などである。一方で、A I の利用には莫大な電力が必要になり、データセンターの建設にも土地が必要であることから、環境破壊の観点でも指摘されることがあるためその点も考慮する必要がある。

もう一点は、桜井委員の指摘とも関連する。3つの部会との内容の棲み分けと、どの取組がどこに属しているのか、その解像度を上げる必要がある。例えば今の案では、エネルギーとインフラに関連する記述がほとんどないと思われる。加えて公共空間をどう使うか、公共空間における緑の在り方はどこの部会に入るのか、テーマが大きすぎて難しいと思うがここも整理する必要がある。さらにモビリティはどこに入るのか。京都の自転車政策はどのようなになっているかも気になっているが、諸外国では自転車利用や徒歩を促進することで脱炭素に繋げている。

循環型社会について、リペアビリティの取組は2 R にも関わる。また、ごみが出る前の取組と修理し使い続けるという観点は企業の社会的責任にも繋がる。企業の製品によっては修理ができないようわざと作られているものもある。一方で、フランスではリペアができるような指標を作り、義務化している。京都でも先駆けてこうしたことができれば企業側の社会的責任の促進にもつながる。

全体的なトーンとして、人間中心的な記述にならないように留意いただきたい。今は「人新世」と言われ、人間の活動が地球環境にも大きなインパクトを与えている。人間主導で環境を改善していくということにおごりを感じるため、謙虚に人間だけではなく、他の生物というアクターを含めて考えていく必要がある。京都基本構想の審議会にも関わったが、そのなかで話し合った部分にも関連するため、この点についても留意いただきたい。

（事務局）

A I についてのくだりの部分であるが、情報手法的な進化についてはA Iに限らず、情報分野の新たな手法という一般的な意味で記載した。A Iの電力消費についてはご指摘のとおりである。

エネルギーとインフラ、モビリティについての記載は、脱炭素社会の部分で盛り込んでいるという認識であり、地球温暖化対策計画では4つの転換という部分で「ライフスタイル」「エネルギー」「ビジネス」「モビリティ」を盛り込み進めている。公共空間については、13ページでトレードオフの最小化の際に触れており、脱炭素の取組の影響が生物多様性や資源循環の分野での機能で損なわれるものがあるのではないかと懸念がある。一方で、発揮されている機能もあるため、まずはそれらを洗いだすことから始めようということを想定している。

リペアビリティについては、2つの側面がある。ひとつは物質の面で、これそのものは循環型社会の2Rに関わるものである。もうひとつはビジネスのしくみづくりの面で、サーキュラーエコノミーの観点で必要な部分がでてくる。これらに含まれていると考えている。

人間中心的な視点になっていないかという指摘について、京都基本構想ではまちのひとつの姿として「自然への畏敬と感謝の念を抱けるまち」を盛り込んでおり、この環境基本計画の将来像としてもそれを共有したいと考えている。ここには自然を念頭に置いたうえで、それを踏まえ3つの分野の長期的な目標を同時に達成するにはどうしたら良いか、知恵を絞りながら考えていくという部分で表せているのではないかと考えている。

（大久保委員）

A Iについては記述の充実ということでカバーすることになる。2点目、3点目の指摘については、すでに答申案に含まれているということだが、インフラやエネルギーについては環境に関連する部会だけではなく、部局横断的な取組になる。場合によっては、分野横断的な取組に例示的に記載することもあり得る。

4点目の指摘について、人間中心主義から世代間公平や地域間公平と言われていたものから、今は種の間の公平という考えも出てきている。インフラに関連したものであればグリーンインフラやネイチャーベースドソリューション（NbS：自然を活用した解決策）なども例示いただければよいのではないかと。

(事務局)

よりわかりやすいように改善・修正したい。

(実重委員)

どのようにマイルストーンを設けて取組を進めるかが重要である。リペアについて、自身の周りでは「もっぺん」（もう一度）という取組が流行っている。パブリックコメントで多くの市民の目に触れることになるが、カーボンニュートラルやサーキュラーエコノミーという用語を一般市民は知らないと思う。また、環境問題というテーマとして重たすぎるという指摘もある。自然環境を守りたいという課題も大きいテーマだが、市民目線でも理解できるよう整理いただきたい。

(事務局)

環境問題は重いテーマが多いが、取り組んでもダメではないかという無力感を抱かれてしまうと取組が進まなくなってしまう。楽しく行動できるよう取組を進めていくことを大事にしていきたい。パブリックコメントでも前向きな意見をいただけるような計画案としたい。

(尾崎委員)

計画案は簡潔に分かりやすくしてもらいたい。ひとしくみづくりについても、小さい頃からの環境教育を大事にってもらいたい。

(事務局)

子どもへの環境教育の取組は大事である。進める上では、小学生はもちろんだが、中高生を対象にした場合にはこうというものをという観点も検討していきたい。

(大久保委員)

「参加」の点が強調されているが、前回部会の指摘を受けて充実された部分だと思う。もともとは市民が行動するという意味での内容だったが、ワークショップなども踏まえ、計画一連のプロセスに参加の仕組みを入れている点は重要である。一方で、具体的にどのような取組になるかは分かりづらいため、書き込める部分があれば記載いただきたい。

本日の意見を踏まえ、答申素案を修正し最終案を作成していきたい。今回の部会では、本質的な部分を大きく変えるというような意見より、より内容を充実させることや明確化させる部分についての意見をいただいた。今後の修正案の内容確認については、部会長に一任いただきたいと考えるがいかがか。

(一同異議なし)

(事務局)

この間、環境基本計画の策定にあたって貴重なご意見を賜り、改めて御礼申し上げます。ご指摘いただいているとおり、答申の内容をよりわかりやすくするとともに、環境基本計画を策定するにあたっては、市民や事業者から手に取って見て、理解していただき、行動に移してもらうことが重要だと考えている。ご指摘のように用語等わかりづらい部分はまだあるが、例示や写真、図などでわかりやすくし、京都の環境の保全・維持につながるような計画にしたい。引き続きご指導のほどお願い申し上げます。

3 閉 会

(以 上)